様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４６８１

研究課題名（和文）イランの思考表現スタイルと学校文化ー日米仏との比較からー

研究課題名（英文）Styles of reasoning and school culture in Iran

研究代表者
渡邉　雅子（Watanabe, Masako）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：２０３１２２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、コミュニケーションの基本である「書く・語る」様式に現れる思考とその表現法がイランの学校でいかに教えられ、それらによりいかに児童・生徒が社会化（社会の成員となるための準備）されるかを明らかにすることである。具体的には、作文や小論文の型に現れる思考の型を作文教科書（小学校１年から高校3年まで）から明らかにし、歴史教科書に現れる自国の過去の語りの分析から、時間概念や因果律をもとにいかに過去が理解され、未来の予測が行われるのかを明らかにする。作文の型からは、イランの社会で流通する「論理」の型を、歴史の語りからはイランにおける価値に基づいた「合理的な行動と合理性」を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
論理的に書いたり考えるたりすることの重要性が教育やビジネスにおいて喧伝されて久しい。しかし<論理的>に書いたり考えたりする方法は普遍的なものでも一つに収斂するものでもなく、国や文化圏によって大きく異るものである。イランは厳格なイスラームの国として知られているが、詩を中心にしたペルシャ文明の中心地でもある。そこでは宗教と文化が融合した伝統的な作文の型があり、歴史教育で独自の歴史観が展開され、価値に基づいた合理性と合理的行動が教えられている。本研究は、学校で教えられている作文・小論文の型に現れる論理と思考の型を明らかにすることで、イランにおける論理の型と合理性を抽出したことに学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify what kinds of style of writing and narrating are taught in Iranian schools and how these basics of communication socialize students in Iran. The study analyzed the structure of writing through writing textbooks and extracted the logic of writing and logical thinking style. The study also analyzed history textbooks as well as history lessons and identified how time conceptions and causality were illustrated and how the way of understanding the past was reflected in the way of speculating the future. The study as a whole revealed the style of logic and specific forms of rational action and rationality taught in Iranian schools.

研究分野：社会学・比較教育

キーワード：イラン　思考表現スタイル　作文教育　歴史教育　論理的思考　合理的行動　思考の型　社会化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

論理的に書いたり、考えるたりすることの重要性が教育やビジネスにおいて喧伝されて久しい。教育においては、2007 年に改正された学校教育法に「思考力・判断力・表現力」が学力の三項目の一つに位置づけられた。思考力の中核となる論理的思考については、「結果に至るまでの論拠を示すこと」、「自分の主張に合わせた証拠・推論をまとめ上げ表現する力」、「事象を互いに関連づけること」などがその中身として有識者会議で議論された（文部科学省 2006 年）。一方ビジネスにおいても、論理的思考は、意思決定や問題解決を行う時に必要不可欠な技術または能力とされている。しかし、その定義となると、「ロジカル・シンキング」の名のもとに帰納や演繹、因果関係を用いて素早く結論づけたり仮説を検証したりすることや、「証拠を示して説明すること」、「筋道を立てて話すこと」など多様である。教育でもビジネスでも重要な能力と位置づけられながら、論理的思考の定義で二つの分野に共通するのは、説明したり議論したりする時の手続きとして「証拠を示すこと」くらいである。しかし、「論理的」であることには一つの普遍的な定義があるのだろうか。教育においてはいかなる<論理>が教えられているのだろうか。

厳密に言えば、あることがらが論理的に正しいかどうか証明できるのは、「形式論理」の「形式」においてのみである。形式論理とは、数学の証明や論理学の三段論法など論証と推論の「型式」を指す。いずれも真（実）とされる前提から始めて、真（実）の結論に至る一連の「手続き」を数式や論理式で示している。その目的は、矛盾や誤りなく推論したり議論したりして正しい結論を導くことにある。他方、現代ではレトリックと呼ばれる修辞学は、聞き手や読み手に白のものを黒と思わせることも可能にする説得の技術であり、形式論理とはまた異なる論理がそのベースにある。修辞学の目的は、議論によって相手を説得したり納得させたりすることなので、日常で使う論理はこのレベルの厳密さで十分であると言われている。

しかし論理的であることにはもうひとつの考え方がある。それは、文化に根ざした論理、あるいは社会で作られた論理であり、本研究ではこの第三の考え方を「思考表現スタイル」という言葉を使って明らかにしていく。調査対象にするのはイランである。

２．研究の目的

イランは厳格なイスラームの国として知られているが、詩を中心にしたペルシャ文明の中心地でもある。イランは、ペルシャ語を公用語として 30 あまりの言語が使われている多言語多民族社会であるが、そこでは宗教と文化が融合した伝統的な作文の型があり、それによって文化的な統合が行われるとともに、歴史教育においては独自の歴史観が展開され、価値に基づいた合理性と合理的行動が教えられている。本研究は、学校で教えられている作文・小論文の型に現れる論理と思考の型、および歴史教育における因果の把握と過去の解釈の方法を基にした未来予測の方法を明らかにすることで、イランにおける論理の型と合理性を抽出することを目的とする。

<論理的>に書いたり考えたりする方法は普遍的なものでも一つに収斂するものでもなく、国や文化圏によって大きく異なるものであることを、イランを例にアメリカ、フランス、日本とも比較しながら実証的に示すことに本研究の学術的意義がある。

３．研究の方法

分析の枠組みと研究対象、調査手順

思考表現スタイルとは、社会で共有された「書く型」に現れる「考える道筋」、「考える手続き」を指す。つまり、書く型に現れる「思考の型」である。書く型は、修辞学が扱う一分野ではあるが、「思考表現スタイル」は、ある社会の中で説得しやすく納得しやすい型がどのように創られ、学校で教えられるのか、そしてその型はどう継承され、変化するのか、それはなぜかまでを明らかにするために用いる。数学を含めた形式論理と修辞学の論証の手続きは、世界に共通の手続きとして広く受け入れられているが、各国の学校で教えられている小論文や作文の型は、形式論理や修辞学の共通の手続きを部分的に組み込みながらも、独自の論の展開方法を持っているからである。

イランにおける「書く型」を抽出するために、イランの作文教科書を翻訳の上、小学校１年から高校３年までを読み通し、いかなる作文・小論文の型が頻用されているのかを特定する。
そして特定した作文・小論文の分析のための「論理的」であることの指標として、30 カ国を超える学生の論文の分析を行い、類型化を試みた応用言語学者のカプラン（R.Kaplan）の指標を用いる。カプランによれば、論理的であると感じる指標は２つあり、それは統一性と一貫性であるという（Kaplan 1966:5）。統一性とは、説明に必要な部分がすべて揃っていると生まれる感覚であるのに対して、一貫性とはそれら必要な部分が読者に理解可能な順番で並んでいると生まれる感覚である。そうであるならば、<論理的>であるとは「読み手にとって＜必要な部分＞が読み

手の＜期待する順番に並んでいる＞ことから生まれる感情である」と定義できる。この定義に沿って、イランにおける作文・小論文では何が必要な部分とされ、それがどのような順番で配置されているのかの構造分析を行う。さらに 2014 年に行ったテヘランでの作文授業観察と教師へのインタビューにより教科書分析の補完を行う。

さらに歴史教育においては、いかなる因果の型と時間認識、とりわけ過去の理解の方法を反映させた未来予測の方法が用いられ教えられているのかを、歴史教科書（初等教育においては社会科の教科書の歴史の部分、中等教育では翻訳された「イランの歴史（世界の教科書シリーズ）」、さらにイランのシーア派イスラーム学教科書（I、II））およびテヘランにおける授業観察の分析から明らかにする。

４．研究成果

以下では調査結果と主な知見を述べる。イランの歴史観や書き方の伝統および教育に関する先行研究との関連については別稿で述べたい。

4-1.作文・小論文の構造に現れる＜論理＞と思考表現スタイル

まず作文教科書の分析からは、イランにおいて初等から後期中等教育まで繰り返し現れる作文のテーマは、①自然に関するもの、②道徳・規範に関するもの、③宗教に関するものの 3 つに大別できることが分かった。書くジャンルに関しては、①テーマを与えられての作文、②諺・詩の一節の敷衍、③物語の続きを書く、④絵や写真などの視覚イメージの描写、⑤その他手紙、文学的断片、報告書、説明が見られる。

上記に挙げた 3 つのテーマを書く共通の構造としては、テーマ（題目）に続き、前書き、本文、結論の 3 つの部分で書くことが教科書で勧められている。本文は 3 つの段落で書くことが示され、最初の段落では、テーマの背景を説明し、二番目の段落は、テーマについてのより詳細な説明や例、文章の雰囲気づくりに割り当てる。三番目の段落でさらに詳細を説明する。最期に、自分の言いたいことを一つの段落でまとめる。まとめは詩の一句や質問の形でもかまわないとされている。この構造は、小学校で示され高校の修了学年まで変わらないことから、「エンシャー」と呼ばれるペルシア語作文の定形の構造だと結論付けられる。

この構造に現れる顕著な特徴は、題目がいかなるものであっても、結論となる部分はほとんどが神への感謝、または道徳的な金言（諺や詩の一節で表現されることもある）で終わっていることである。とりわけ自然について述べたものは、それが四季であっても、雨であっても、蚊についてであろうとも、それらすべての創造主たる神への感動に満ちた感謝、ないしは金言で締めくくられるのが作文の定形となっている。この作文の結論となる素材を与えるために、宗教上の教訓やそのもとになる物語として教科書に提示されたり、諺や詩の敷衍を行う課題として初等から後期中等教育の作文教科書の各章に必ず示されている。

作文を書く手順として、最初にテーマに関連して思いつくことをすべて挙げるブレインストーミングを行い、そこから書く内容を精選していくことが勧められているが、この時、格言・金言や詩の一節が、体験や知識とともにブレインストーミングの要素としてすでに明示されている例が作文教科書には多数存在する。このことは、書く準備段階においてすでに「結論」がブレインストーミングの要素の中に明示されていることを示している。

また作文の内容を考える際に、テーマに関して様々な質問を行うことも勧められているが、この質問も、結論に向けて 3 つのステージに分けられている。第一には、テーマが何であるのかを特定する質問、第二は、「もしも・・だったら」と仮定することで、概念やテーマを広く感じることができ、体験のレベルを超えてテーマを様々な状態や状況でイメージし、創造を行うことができるようになるとされる。第三には、テーマについてこれまで語られてきた金言や名言、クルアーンの章句、ハディース、教訓的な言葉、ことわざ、詩、隠喩を用いて考え、このレベルでの質問を考えることである。この質問の配置によっても、作文の核心はなにかを知ることができる。テーマに関する書き手の経験や知識から出発して、それらの体験を超えたイメージへと考えを飛翔させながら、最後の着地点として金言やコーランの章句、詩、諺が示す教訓としての「真実」に到達させるのである。

作文教科書は、発達段階に呼応して内容は高度になってゆき、高校ではアカデミックな論文の書き方が説明されている。しかし、用いられているのは研究論文のレベルの書き方であり実際に高校でこうした書き方の訓練が行われているとは考えにくい。他の作文の課題や形式とも大きく異なっている。さらにイランにおいて、コンクールと呼ばれる全国共通の大学入学資格試験の問題は、すべて多肢選択問題であり論文も、短い論述すら書く機会はないため、アメリカのエッセイや小論文のような形式で「書く」訓練は行われておらず、まして研究論文の形式で書く機会も必要性も無いと思われる。

これらのことから、イランにおける作文は、様々なテーマを扱いながらも、それぞれのテーマの多様な側面を、すでに決まっている結論に向けて準備する「目的論的」な特徴が作文を導くロジックを作っていると考えられる。結論を決めてから書き出すことは作文を書く際の鉄則だが、その結論がすでに与えられているもの、とりわけ「真理」として社会や宗教から定言的命令として下されているものを置くことがイランの学校作文の顕著な特徴であり、イランの思考表現ス

タイルを特徴づけるものである。
イランの作文においては、アメリカのエッセイのように筆者の主張を認めさせるためにデータを使って説得したり、フランスのように、より広い視点・新たな視点を提示するために弁証法の形式で文献を引用して厳密に論証したり、日本のように読み手に配慮を示したり感情を共有したりすることでもない作文の目的がある。現代の小論文で重視されている「論証すること」にはイランの作文は馴染まない。時間の淘汰をくぐり抜けて残っている金言や、この世における真実あるいはこの世の経験を昇華させるものとして共有された詩の一節、そして神の存在を論証してみせることには無理があると同時に意味が無いからである。それらはもはや論証する必要も個人が変えることもできない真実として存在しているからである。

4-2.　歴史教育に見る合理性と合理的行動

イランにおいて歴史教育は、小学校レベルでは社会科の教科書でイランとイスラムの歴史が教えられている。小学校 5 年生と 6 年生で、イランの政治・経済・社会、文化、環境など社会科の枠組みで編集された教科書のところどころで、古代から 1979 年のイスラム革命までをイランの歴史として学び、イスラムの歴史は聖典であるクルアーンをもとに預言者ムハンマドとその継承者たちをエピソード風の物語の形式で紹介している。
歴史の教授法の特徴としては、厳密な教科書の「暗記」が中心になっていることである。最初の授業では、教師が教科書を朗読してお手本を示し、語句の説明を行う。その後児童にも読ませて発音や読み方の間違いを正す。児童たちは家で、親の助けを借りながら教科書を暗記し、翌日の授業では、どの程度児童たちが教科書を覚えているかのチェックが教師によって行われる。この時、教師は教科書の途中まで読み、間を取ると、それが合図となって児童はその続きを暗唱する。こうして教師と児童のかけ合いで授業はテンポよく進行していく。
イランの歴史は、先述したように社会科の教科書の中で地理や社会生活の規則や規範、社会制度、産業構造などとともに学ばれている。授業で取り扱われている王朝の興亡史はテクストを教師が選択している。特筆すべきは授業においては人民の声に耳を貸さなくなった歴代王の驕奢による民の疲弊と反乱、それに乗じた異民族の攻撃が王朝滅亡の原因として語られていることである。いかなる有能な王が王朝を興しても、時の経過とともにこの原因と結果は逃れられないサイクルとして歴史を形成する。歴史的な状況がどうであっても、同じ原因（因果）でイランの王朝の二千年以上にわたる興亡史が語られているのは、イランの歴史教育における語りの特徴と言える。ここに歴史の「真実」と教訓があると考えられている。
歴史の授業観察からは、ペルシャ帝国の栄光と異民族支配による屈辱という「興亡のサイクル」を回す普遍の因果（王の贅沢と人民の疲弊）のダイナミズムを学ぶ中で、「王」と「人民」、「支配する者」と「支配される者」、そして「私達」と「敵」、転じて「善」と「悪」という鋭い二項対立によってものごとを捉える歴史理解の枠組みがあることが看守できた。ここでは、歴史の具体的な状況そのものよりも、人間の長い体験の蓄積から抽象的な原理を引き出すことに価値を置く志向性が見られる。それは作文教育で、いかなるテーマからも真実と教訓を引き出そうとする思考法と親和性がある。王による専制的な支配は、君主制という制度が持つ一般的な傾向として、そしてより本質的には、王個人の個性や人格でなく人間の本質として捉える傾向がある。
この「歴史のサイクル」の原理が壊された唯一の例外は、イスラームによる支配が確立した時であると歴史授業で教師は説明している。傲慢な王の治世に不満を募らせた人々は、戦うかわりにアラブ人の支配とその宗教を受け入れた。イスラームの受容と 21 世紀におけるイスラーム革命により、イランの未来はシーア派イスラームの担い手の中心的存在として、輝かしい未来と責務があると教師により語られている。
この説明の背景には、1978 年のイスラーム革命以降続いている宗教法学者による政治的統治と教育の統制がある。しかし王朝興亡史を基にしたイランの歴史と、アダムから人類の救済まで一続きの始点と道程と終点が想定された独自の目的と因果的な説明を持つイスラームの歴史という相容れない原理は、児童たちにはいかに理解されているのだろうか。授業観察からは、取り戻すべきは過去のペルシャ文明の栄光にあると児童たちが捉えている様子がうかがえた。それでも、イランの「循環するサイクル」とイスラームの「始点と終点が決められた歴史」は、歴史は偶発的に開かれたものではなく、「決定され目的論的」であることにおいて共通点を見出すことができる。これは、いかなるテーマを扱っても結論が決まっている作文の構造とも親和性があるものである。
こうした時空間の枠組みにおける合理的行動とは、原理に沿って生きること、定言命令を受け入れ従うことである。蓄積された伝統と歴史から導き出された智慧と真実の前にあっては、個人が生きる時間は短く、個々の人間が到達できる智慧と真実はあまりに限られたものである。イランの歴史を含む小学校 6 年生の社会科の教科書には、「決定」という章があり、人生の中で重要な決定を行う際には、宗教規則に反するものはないか、社会の規則や法律に違反するものではないか、家族や他人に害を与えるものではないかと自問自答させ、重要な問題は聖典クルアーンの命令に従い、父母や教師などの年長者に相談することを明示している。

これまでイランの教育に関する研究は、欧米や東アジア地域の教育研究に比較しても数が限られているうえ、扱われるテーマは教育と宗教・国家・政治の関係を明らかにするもの（桜井 1999;

森田 2007)、あるいは教授法の特徴や授業改善に関する研究が主たるものだった。本研究ではイランの学校でいかなる<論理>（logic）と思考の型が教えられているのかを、コミュニケーションの基本である「書き方」・「語り方」に焦点を当てて実証的に明らかにしたところに意義がある。社会によって創られる論理と合理性は、子どもの社会化（socialization）が最も有効に働くとされる初等教育において最も顕著に現れるものであり、本報告書においても初等教育に焦点を当てて知見をまとめた。

なお、作文教科書の最新版(2019 年刊行)においては、引用に教科書の作成者である教育研究計画庁の許可を得る必要があることが記されているため、直接引用を避けた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 渡邉雅子	４．巻 30号
２．論文標題 「フランスの思考表現スタイルと言葉の教育－「能力」と「教養」の対比から」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『フランス教育学会紀要』	６．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡邉雅子	４．巻 65巻
２．論文標題 「日本の国語教育における目的別文章：アメリカ、フランスとの比較から」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『指導と評価』	６．最初と最後の頁 33-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡邉雅子	４．巻 83(4)
２．論文標題 「フランスの思考表現スタイルと政治的教養の育成 アメリカとの比較から」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『教育学研究』	６．最初と最後の頁 180-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.84.2_180	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 WATANABE, Masako Ema
２．発表標題 “Styles of Reasoning and Framing Tem-porality in History Education.”
３．学会等名 10th World Education Research Association Focal Meeting, Gakushuin University, Tokyo (Aug. 6, 2019).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邉雅子
２．発表標題 「国際バカロレアの知の理論が目指すもの（課題研究「考えることを考える－哲学する教育の可能性」）
３．学会等名 日本カリキュラム学会第30回 京都大学（2019年6月22日）.（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邉雅子
２．発表標題 「カリキュラムの見えない「前提」を問い直す－比較社会学・知識社会学の視点から－」（課題研究「カリキュラムの社会学のこれからを問う」）
３．学会等名 日本教育社会学会第71回大会 大正大学（2019年9月13日）.（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邉雅子
２．発表標題 「フランス式小論文の思考表現スタイルと＜書く＞教育の実践－フランスの高大接続の構造」
３．学会等名 日本教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡邉雅子
２．発表標題 「歴史教育にみる合理的行動と社会化のタイポロジー －アメリカ、日本、イラン、フランスの比較から－」
３．学会等名 日本比較教育学会第53回大会　東京大学本郷キャンパス（2017年6月25日）
４．発表年 2017年

１．発表者名 渡邉雅子
２．発表標題 「フランスのことばの教育と思考表現スタイルに見る＜深い学び＞「能力」と「教養」の対比から」
３．学会等名 フランス教育学会第35回大会　放送大学東京文京学習センター（2017年9月9日）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masako Ema WATANABE
２．発表標題 “Abilities Tested in University Entrance Examinations and Different Forms of Socialization: Comparisons of the United States, Japan, Iran, and France.”
３．学会等名 TASE (Taiwan Associati-on of Sociology of Education) 23rd Annual Conference 2017（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Masako, Ema WATANABE	４．発行年 2019年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 334
３．書名 Sociology of Comparative Examinations, "Typology of Abilities Tested in University Entrance Examinations: Comparisons of the United States, Japan, Iran, and France," pp.71-97	

１．著者名 渡邉雅子「第5章思考と表現を練磨するフランス語の「書く」教育」（細尾萌子・夏目達也・大場淳編）	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 298
３．書名 『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関